

SHOW HEYシネマルーム

★★★★

ムーラン・ルージュ

2001 (平成13) 年10月鑑賞

<試写会>

Data

監督: バズ・ラーマン

出演: ニコール・キッドマン/ユアン・マクレガー

👁️👁️ みどころ

早い、早いカメラワークに目がついていくのが大変。ミュージカル映画が好きな人とニコール・キッドマンのファンは必見。だが、それがダメな人は、絶対入るべからずの作品。しかし、見なきゃ批評はできないよ・・・。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<愛・愛・愛のミュージカル>

これはかなり毛色の変ったミュージカル作品。舞台は今からちょうど100年前、1900年のパリ。そして、かの有名な「ムーラン・ルージュ」(舞台、キャバレー、ダンスホール、売春宿などを兼ねた一大歓楽施設。踊り子がスカートをめくり、足をあげて踊るカンカン踊りが有名)。

主人公はニコール・キッドマン扮する「ムーラン・ルージュ」のトップスター、サティーン。そしてこれに恋する若き劇作家(ボヘミアン)でユアン・マクレガーが扮するクリスチャン。そして悪役は、金と権力にモノをいわせてサティーンをわがモノにしようとする「スケベじじい」の資産家の公爵。この3人が織りなすパリの「ムーラン・ルージュ」を舞台とした愛の讃歌。喜劇のような悲劇のような・・・。とにかく、愛、愛、愛、のミュージカルだ。

「ボヘミアン」という言葉は、いかにも野心に満ちた才能豊かな若者たちをあらわすいい言葉だが、みんな「貧乏」と相場が決まっている。加藤登紀子が「小さな家とキャンバス 他には何もない・・・」の歌い出して歌う「百万本のバラ」における貧乏絵かきも同

じょうなものだ。

この作品はミュージカル映画だが、何と最初に「サウンド・オブ・ミュージック」の音楽が出てくるわ・・・、途中ではアメリカのジャズが出てくるわ・・・、で頭が混乱する。さらにカメラワークが無茶苦茶早いので、目がついていくのが大変でしんどい。また、インド風の創作芝居がモチーフとなっているため、踊りもインド風。そして「マハラジャ」がキーワード。何のこっちゃ・・・？

<目まぐるしい場面展開>

画面もオーソドックスなミュージカルのそれではなく、CG的なものが多い。現代版「ロミオとジュリエット」だが、2人のラブソングの場面も「ウエストサイド物語」での「トゥナイト」などの古典的な場面とは全く趣を異にしており、ゆっくりと愛の語り合いを見ることはできず、画面を追うのがめちゃ忙しい。このようにかかなり疲れる音楽と画面だが、出来ばえはすばらしく、ぐいぐいとひきこまれていくことうけ合いだ。

ニコール・キッドマンは相変わらず魅力的でいい。しかし、肌も露わな踊り子姿はずっと見ているとあきてくる。ニコール・キッドマンの魅力のためには、もっといろいろなファッションを見せて欲しいものだ。

歌もニコール・キッドマンが自分で歌っているとのことだが、全く違和感はない、というより、下手くそとは思えない。昔の名作「マイ・フェア・レディ」では、オードリー・ヘップバーンはイライザにピッタリの女優だが、歌はあまりうまくなかった。それに対してジュリー・アンドリュースは歌はうまいが容姿がもう一つ、ということで悩んだようだが、この「ムーラン・ルージュ」でのニコール・キッドマンの歌は結構うまくやっているように見える。

歌があまり好きでない人や、もともとミュージカルに違和感を持つ人には到底おすすりできないが、とにかく興味深い作品であることはまちがいない。しかし、賛否両論が極端に分かれ、好き嫌いも二分すること確実な作品だ。

2001年(平成13)年11月21日記